

氏 名	チェイム ジョン 崔 任 廷
学 位 の 種 類	博 士 （美 術）
学 位 記 番 号	博 美 第 411 号
学位授与年月日	平 成 25 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈論文〉心象表現における伝統技法の可能性 －友禪の制作を通して－ 〈作品〉森
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教 授 （美術学部） 山 下 了 是
（論文第 1 副査）	” ” （ ” ） 本 郷 寛
（作品第 1 副査）	” ” （ ” ） 菅 野 健 一
（副査）	” ” （ ” ） 豊 福 誠

（論文内容の要旨）

本論文では、日常の中で自然が持つ生成消滅の秩序を通じて人間と自然の関係を認識し、自由な創造性の中で、自然の形象化における新しい造形の可能性を模索しようと試みた。これは自然を写生形式のリアルな表現ではなく、自然を通して見つめた私自身の心象をモチーフとして、造形的実験と内的思考により生命の源泉を探ろうとしたものである。

心象を表現するために友禪染という技法を選択しているが、それは無限の空間と想像力を持つ自然が主題形成の重要な要素となり、染色が持つ独特な深みによる豊饒と神秘さを持って表現し、さらに 自然のモチーフが動く効果を表現するために適当だと考えたからである。

友禪染は日本が誇る伝統的な染色技法で、すべての工程を繊細で緻密な手作業によって絵画のように描き染めていく日本でしか見られない貴重な染め技法である。そして、おもに日本の伝統的衣装である着物を彩色するための技術であり、着物と共に発展してきた。伝統的な民俗衣装を持っている国は多々あるが、友禪のような緻密でかつ自由な表現が可能な染色技法を用いている国は少ない。このような素晴らしい技法を韓国をはじめ多くの国々に紹介していくことは重要であると考ええる。そのために、本研究では友禪染の糸目糊、蒔き糊、色糊などの技法を用いての表現を中心に作品制作を通して論じた。

第 1 章では、心象表現の意味、藝術作品としての心象表現、心象表現における造形と色彩を取り上げた。まず、心象表現の意味については、作家の心象が表現された作品を分類し、その意味に述べ、藝術作品における心象表現として、自身が影響を受けた現代作家を中心に考察した。また、心象表現について、特に抽象表現の形態と色彩に着目しながら理論的に論じた。

第 2 章では、友禪染の誕生と発展、そしてその特徴を述べた。日本の代表的な伝統的染色技法である友禪における防染の成立時期と歴史的背景、図柄の歴史や文化史的な観点も考察しながら着物を例に友禪染の特徴を考察した。

第 3 章は、友禪染の基本工程、材料と道具、技法に分けて述べた。
基本工程では、図版を用いて簡潔に説明記述しまた友禪染に使用されている材料と道具の特質を述べた。技法については、糸目糊、蒔き糊、叩き糊、色糊の基本内容をもとにして自身の創意を加えた糊組

織割合と色糊などを数値化して示すことを試みた。さらに、技法について探究し作品の完成度を高めるため、蒔き糊、叩き糊、色糊の実験を行い得た結果から糊の特徴とその効果について考察した。

第4章では筆者自身の修了作品における発想とイメージそして友禅染による実制作を通して、伝統技法による心象表現を試みた。

筆者は、修了作品において心象を表現するという主題を意識しながら、自然を媒介にしてその一部分である花と森のイメージを作品として形象化することを目指した。実際の制作を通して無限の空間と想像力を持つ自然は主題形成の重要な要素となり、染色が持つ独特の深みを友禅染の技法によって画面を演出することができたと考える。また白い線となる糸目糊と同時に、蒔き糊、叩き糊、色糊の技法を作品に取り入れたことで、制作作品は心象表現に、より強さを持たせることが可能となった。

前章までの考察をもとに、終章では、心象表現に対する伝統技法である友禅染の可能性について論考した。

伝統的友禅技法にも様々な技法があるが、作品の雰囲気をもよりよく引き出す技法を見つけ出そうとした。それは、作品の完成度を高めるためにも必要なことで、様々な工夫を凝らしながら、自身の作品に合致した道具を見つける研究を続けていく必要があるからだ考える。そこで、伝統的な技法である友禅染を自分の作品を通してその可能性を論じた。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、制作者としての筆者が、自身の心象を表現するための制作技法として研究してきた、日本における伝統的な染色技法である友禅染を通して、その自由で多彩な技法を絵画性を有する固有の特徴としてとらえ、伝統技法としての友禅染のこれからの可能性について論じたものである。

論文の内容は、筆者が友禅技法を学び、作品制作に取り組みながら、糊置き技法習得に至るまでの経緯をもとに実験や制作の方法と結果を記録としてまとめ、それについての考察を行ったものである。そして、その成果としての修了制作の表現内容と方法を詳述し考察している。

論文の構成は、第1章で、筆者が表現のテーマとする心象表現についてその意味を述べ、また、絵画表現の中から参考作家と作品を取り上げ、その心象表現について考察し、心象表現における造形と色彩について論じた。第2章では、友禅の歴史とそこから見出される特徴について述べている。第3章では、友禅染の具体的な制作工程と、その技法に伴う材料と道具について述べた。さらに、筆者が技法習得のための糊置きの技法の実験結果を軸に、友禅染技法の考察を行っている。第4章では、これまでの論述をもとに修了作品についての表現内容とその制作工程を詳述し、友禅染の絵画性について論じようと試みた。そして終章では、筆者が課題とした友禅染が、絵画性を活かした表現として有効であることを今後の友禅染の可能性として述べている。

本論文の成果として、友禅染における多様な糊置き技法を併用することで、自由で豊かな絵画性の強い表現が可能となることを見出し、友禅の新たな表現の可能性を示した点があげられる。

本論文の多くが技法解説と筆者が繰り返した実験を整理し記述する形式で構成されているのは、工芸制作における技法・素材・表現研究として明快な内容にするためである。各章での考察においては、制作者としての視点からの考察も加わり、全体として本論文が工芸家ならではの技法・素材・表現論として成り立っていることは、興味深い内容として評価できる。

審査の過程では、特に第3章における友禅染技法の詳細な実験の記述、第4章での修了制作工程の丁寧な記述が価値あるものとして評価された。また、本論文の成果が修了制作の成果と密接に関係づけられていることがあげられ、今後の研究が大いに期待できる内容であるとの意見も出された。

審査結果として、工芸が地道な技法、道具、素材の研究の積み重ねの上に成り立つことの重要性を示唆し、研究の成果を伝統技法の今日的可能性として示したオリジナリティーのある論文として高く評価し合格とした。

(作品審査結果の要旨)

論文に述べられているように、日常の中で自然が持つ生成消滅の秩序を通じて人間と自然の関係を認識し、その自然を形象化することをテーマとしている。本人にとってそれは写真形式のリアルなものではなく、自分自身の心象と対比してそれを風景として抽象表現したものである。

江戸時代前期の終わり頃に始まったとされる、着物の染色としての友禅技法は今日まで脈々として続いている。それは繊維上に絵画として表現できる格好の技法であることが大きな意味をもつ。事実、尾形光琳など絵師達が着物に直接表現していたことなども考え合わせれば、江戸期の障屏画と着物への表現描写には隔たりがなかったであろうと推察できる。本作品ではそのような空間・時間の解釈が巧みに適応されて、作者の心象性が余すところなく表現された作品である。

友禅技法とは、糯米の粉と米糠を主原料として長時間蒸し上げた糊を、柿渋をしみ込ませた和紙の筒に真鍮製の小さな金物を装着した道具の中に入れ、その先端から糸状の糊を絞り出して絹地に‘かたち’となるよう置いてゆく。そのことから、置かれた糊のことを糸目糊と呼ぶ。絞り出された輪郭線としての糊が乾燥した後、地入れの工程を踏むことで更に布帛にしっかりと食い付かせることができ、輪郭線としての糊の内側を染料で彩色してゆく。この友禅技法には他に、叩き糊技法や蒔き糊技法などがあり、極めてデリケートな表現をすることが可能で、心象性をテーマにした内容には誠に適したものである。こういった技法が随所に実に効果的に駆使されており、深色と相まって作品の奥妙さを演出している。

本作品は間隔において、左側と右側の異なった面積の二つの画面から成り、一方を「夜」他方を「昼」とし、時間を異にすることで宇宙的無限大の空間を想定している。これは尾形光琳の‘紅白梅図’あるいは俵屋宗達の‘風神雷神図屏風’また金剛力士像などにみられる2極を対置させる東洋思想とも考えられるが、それらとは時代を隔ててこの時代における[esprit]の表出したもので、ある種の爽快感に包まれる。モチーフを‘華’や‘種子’にしたことで生命の連鎖、延いては輪廻観・無常観を想起させるものがある。

よって、高く評価できる結果となった。

(総合審査結果の要旨)

韓国からの留学生である申請者の、友禅への取り組みが始まったのは5年前のことである。

韓国の大学における染織関連の教育は、日本の、特に実材実技を中心とする本学の事情とは異なり、ペーパーデザインにウエイトが置かれたテキスタイルデザインを主としているようで、当時申請者が持参したポートフォリオの内容も、どちらかと言うとデザイン系の学生のそれに近いものであったが、中に数点のろうけつ染めの作品があり、それらは絵画的感覚に優れていて、独自の造形観を持っていることを感じさせた。

真面目な彼女は、真摯に友禅の基本から学ぼうと考えたのであろう。まず江戸期の友禅の模作を制作、その後もそれまで培ってきた自分の感覚はあえて抑えて、創作ではあるが染色的な文様を強く意識した感じの作品を作り続けた。しかし、いつしか迷いが生じ、悩み始めたようである。1年が過ぎようとする或る日、私は見かねて一言だけアドバイスをした。そして次の作品からモチーフが変わる。退屈な文様の要素は消え、ポートフォリオに見た絵画的な造形が友禅で表現され始めた。論文の記述にもあるように友禅の技法がもたらす造形効果は彼女の持ち前の感覚と上手く咬み合ったのであろう。次から

次へと作品が出来上がっていった。本当の基本は友禅ではなく、自分自身の造形観にあると気がついたようである。

それから4年を経て、技術も向上し、学外の公募展や個展など積極的に活動し、経験と実績を積み上げてきたのであるが、常にその制作のモチーフとなったのは、彼女自身の心の内に有る感情の動きであり、彼女の中にある造形世界である。彼女はそれを心象表現と呼ぶ。

今回の作品はこれまでの集大成であり、又、これからの制作活動の出発点ともなるべきものであるが、彼女ほど素直に、そしてナイーブに、自分の感情の動きを表現する学生に出会ったのは初めてである。そして、論文も難しい表現はいっさい使っていないが、見事に作品に即していて、読み終わって心地よい清々しさをも感じる事ができた。

審査員一同、これからの健闘を祈りつつ審査を終えたが、その評価は極めて高いものであった。